物理的・化学的性質

① 本品は、黄褐色～緑黄色の粉末で、臭いはない、又は僅かに特異な臭いを有する。

② 本品は、ジメチルホルムアミドに溶けにくく、水、エタノール、エーテル及びクロロホルムに極めて溶けにくい。

③ 融点　約260℃（分解）

確認試験

① 本品の無水エタノール溶液（１→15,000）15mLにスルファニル酸試液５mL及び新たに調製した亜硝酸ナトリウム溶液（１→100）５mLを加え、密栓し、65℃の水浴中で10分間加温するとき、溶液は、赤色を呈する。

② 本品の無水エタノール溶液（１→15,000）15mLに水酸化カリウムのエタノール溶液（１→100）５mLを加えるとき、溶液は、黄色を呈する。

③ ４，４′―ジニトロカルバニリドの定量法により得た試料溶液につき、吸収スペクトルを測定するとき、波長428～432nmに吸収の極大を示す。

④ ２―ヒドロキシ―４，６―ジメチルピリミジンの定量法により得た試料溶液につき、吸収スペクトルを測定するとき、波長538～542nmに吸収の極大を示す。

純度試験

① pH　本品0.20ｇ（0.195～0.204ｇ）を量り、水20mLを加え、かき混ぜた溶液のpHは、5.0～7.0でなければならない。

② 塩化物　本品0.20ｇ（0.195～0.204ｇ）を量り、水20mLを加え、２分間煮沸し、放冷した後、ろ過する。このろ液５mLを量り、希硝酸６mL及び水を加えて50mLとし、試料溶液とする。塩化物試験法により0.01mol／Ｌ塩酸0.4mLを用いて比較液を調製し、塩化物の試験を行うとき、試料溶液の呈する混濁は、比較液の呈する混濁より濃くてはならない（0.28％以下）。

③ 硫酸塩　本品0.20ｇ（0.195～0.204ｇ）を量り、水20mLを加え、２分間煮沸し、放冷した後、ろ過する。このろ液２mLを量り、希塩酸１mL及び水を加えて50mLとし、これを試料溶液とする。硫酸塩試験法により0.005mol／Ｌ硫酸0.6mLを用いて比較液を調製し、硫酸塩の試験を行うとき、試料溶液の呈する混濁は、比較液の呈する混濁より濃くてはならない（1.44％以下）。

④ アンモニウム塩　本品0.30ｇ（0.295～0.304ｇ）をフラスコに入れ、酸化マグネシウム１ｇ（0.5～1.4ｇ）及び水70mLを加え、蒸留装置に連結する。受器には、0.1mol／Ｌ塩酸２mLを入れた100mLのメスシリンダーを用い、留液40mLを得るまで蒸留する。留液に水を加えて100mLとし、この溶液10mLを全量ピペットを用いて量り、ネスラー管に入れ、水を加えて40mLとし、水酸化ナトリウム溶液（１→10）２mL及びネスラー試液２mLを加えるとき呈する色は、アンモニア標準液15mLをネスラー管に入れ、水を加えて40mLとし、以下試料の場合と同様に操作するとき呈する色より濃くてはならない（0.5％以下）。